

「善き未来をひらく科学技術」選考講評

選考委員長 大垣 眞一郎

これからの時代の新しい価値につながる研究に助成しようという議論の中から、このプログラムが新設されました。そして、未来の社会はどうあるべきかという課題に応える研究であるとともに、研究者個人の独創の発意から新しい分野をひらく研究でもあること、この2つが並立、融合するような研究に助成することをこのプログラムの目的としました。

社会のあるべき姿を考えると、気候変動や感染症を含む医療・健康、情報安全保障などの問題のように今まさに直面している課題もありますが、まだまったく注目されていない新たに切り拓いていくべき領域もたくさんあると考えられます。そうした課題にこたえる研究を、「善き未来をひらく」研究と表現しました。大きな理念のみを掲げることにより、幅広い領域から自由で独創的な研究提案が生まれることを期待しているわけです。

このように抽象度の高いテーマのもとで、申請書では研究内容の記述に先立ち、「善き未来をひらくための全体構想」を描いていただくというあまり例のない形式の応募を求めました。それにもかかわらず186件という予想を大きく上回る応募がありました。また応募者中40歳未満の方が21%を占めるなど、若い世代の研究者の方々に興味を持っていただけました。「善き未来をひらく」意識をもつ研究者、それも若手がたくさんおられることは、大変心強いことです。このプログラムが成功の第一歩を踏み出したと感じています。

さて、非常に幅広い多様な分野から、数多くの魅力的な提案がありましたが、限られた数の助成しかできないため、多数の方々のご期待には応えることができませんでした。結果として、非認知能力、害虫防除、および、人工元素に関わるまったく異なる3つの分野からの研究提案を選考しました。

選ばれた研究提案は、それぞれの善き未来の全体構想の下で、具体的で独創的な研究戦略が示されており、大いにその研究展開が期待できます。

ただし、応募全体を眺めたとき、選考委員全員が驚くような未来の課題を設定し、科学技術のこれからの方向を指し示すような提案は残念ながら見当たりませんでした。今後そのような挑戦的な提案が出てくることを期待しています。

生まれたばかりの研究助成プログラムですが、今回選ばれた3件に加え、これから毎年さまざまな分野からの研究提案が積み重なります。高いひとつの理念のもと、応募研究者、キャノン財団、選考委員会が相互に作用し合うことによって、善き未来をひらく科学技術が醸成されていくものと信じています。